

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

いま注目を集める、地域と高校の連携。この連載では、地域課題に取り組み、高校生はどう育つのか、また、学校はどのように地域と連携できるのかを探っていきます。

取材文／江森真矢子

産業遺産について学び発信する活動を通して、新居浜市に育まれる「シビックマインド」

第2回 新居浜南高校(愛媛・県立)



愛媛県新居浜市は、別子銅山(1973年閉山)の繁栄により銅産業や関連産業を興した、住友グループの企業城下町として発展してきた。

人口は県内第3位の約12万人で、高校が5校、中学校が10校、小学校が17校ある。新居浜南高校は1996年に普通科から総合学科高校に再編されたが、その前後は「指導が大変な時期もありました」と同校ユネスコ部顧問の河野義知先生は振り返る。

「マインからマインドへ」 地域資産からの学びの循環

その新居浜南高校は今、ダイナミックな地域情報の発信や、地域への貢献によって数々の賞を受賞するなど高い評価を得ている。また、行政や市民団体とも連携して地域の近代化産業遺産について学ぶ活動の中心的存在ともなっている。主な活動主体となり、牽引役となっているのはユネスコ部の生徒たちだ。

同校が行っている活動(図1)は大きく3つある。ひとつめは、日本の近代化に大きく寄与した別子銅山とその周辺の産業遺産を調査し学ぶこと。ユネスコ部員だけでなく、3年次の課題研究の選択者なども授業の中で取り組んでいる。もうひとつは、

これまでの調査の蓄積を広く外部に発信することで、HPやガイドブックの制作に加え、ボランティアガイドなどを行ってきた。

3つめは学んだことを他者の学びに生かし地域づくりの担い手を育てること。市内の小中学校への出前授業や市民向け講座、スタディツアーの企画運営など高校生が教える側に立っている。全校の生徒が「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」で学ぶ時間も設けられていて、ユネスコ部員が講師となり生徒同士が学びあう機会となっている。

これらの学びのコンセプトは「マイン(鉱山)からマインドへ」。高校生が地域づくりに参画し、人と人とのつながりが生まれる、小中学生や大人たちもその学びの成果に触れてシビックプライド(地域への誇り・その市民としての誇り)を高めお互いに成長していく。そんなイメージだ。河野先生はこれらの活動を「地域の資産を活用した、持続発展可能な地域づくりの学びのサイクル」づくりと位置付けている。

図1 年間の活動と参加生徒

時期	内容	参加生徒
通年	別子銅山の近代化産業遺産現地調査、聞き取り調査など	課題研究「総合」選択者/ユネスコ部員
隔月	校内や地域においての学習会や成果発表会の開催	課外希望生徒
5.11.12.1.2月	「産業社会と人間」「ライフスタディ(総学)」「ライフスタディII(課題研究)」学習成果発表会およびフィールドワーク	全生徒
5.10月	別子銅山の近代化産業遺産を学習する旅行企画・運営	ユネスコ部員
通年	小中学校や地域と連携したワークショップ	ユネスコ部員
7.8月	他地域への現地研修	ユネスコ部員
通年	行政(愛媛県・新居浜市)と連携した企画への参画	ユネスコ部員

図2 これまでの歩み

1996年	総合学科に改組 情報科学部生徒による学校紹介HP制作開始
1999年	情報科学部がHPに地域紹介コーナー設置
1999年	第6回マイタウン・マップ・コンクールNHK会長賞受賞
2002年	NECマルチメディアアート大賞 文部科学大臣賞受賞(全国1位)
2006年	別子銅山近代化産業遺産八十八か所ふれあいめぐりガイドブック発行(愛媛大学教育学部住居学研究室共同制作)
2007年	第8回インターネット活用教育実践コンクール経済産業大臣賞受賞
2007年	新居浜市政70周年記念式典において文化振興貢献による表彰
2008年	優良青少年団体 愛媛県知事表彰
2009年	第1回高校生観光プランコンテスト「観光甲子園」準グランプリ
2010年	旅行会社と提携し「あかがねの道スタディツアー」商品化
2010年	四国初 ユネスコスクール認定
2011年	情報科学部から「ユネスコ部」へ発展的に改称
2012年	第2回ESD国際交流プログラムで部員2人と顧問が海外派遣(パリ・ユネスコ本部にて別子銅山学習成果を発表)
2012年	新居浜市内全中学校で別子銅山登山学習開始。事前学習に協力
2013年	愛媛県教育委員会 地域を担う心豊かな高校生育成事業「地域活性化プロジェクト」指定(13・14年度)
2014年	新居浜市内全小・中学校がユネスコスクール認定

高校発の活動が 市内全小中学校に波及

ここに至るまでの約20年間の軌跡を振り返りつつ、具体的な活動内容をみていこう(図2)。

「私自身、はじめは地域に対する関心はありませんでした」という河野先生が教えるのは工業科目と情報。はじめは授業やユネスコ部の前身である情報科学部で行った学校のHPづくりだった。

他校と差別化するためにはどうか、生徒から出たのが高校のある新居浜市の情報も交えて学校の魅力を伝えていこうというアイデア。新居浜市といえば別子銅山。自分たちで鉱山跡や博物館などに足を運びパノラマ映像など当時の先端技術を駆使

して作ったHPは、1999年以降全国規模のコンクールで数々の賞を受賞することとなった。それは生徒たちの自信につながると同時に、報道によって地域住民の関心も高まり、協力者も現れるようになった。情報発信

力やコミュニケーション能力が高まっただけでなく、地域について深く考えるようになった生徒たちの成長を目の当たりにし、河野先生も変わっていった。

生徒の活動にはさらに力が入り、大人に交じって別子銅山のボランティアガイド講習を受けたり、当時を知る人々へのインタビューを行うなどの広がりをみせていく。知れば知るほど、そして地域の人との交流が広がるにつれ生徒たちの中には「まち」や「ひと」への関心が高まり、徐々にこの歴

史や文化を風化させることなく伝えていきたいという意欲が芽生えるようになったという。

その結果、インターネットでの情報発信だけでなく、ガイドブックの制作やボランティアガイド、別子銅山を舞台とした旅行の企画運営、子ども向けサマーキャンプのスタッフ活動など形を変えて挑戦が続くことになった。愛媛大学の研究室と共同で5年がかりで完成させたガイドブックは、その後、新居浜検定や、新居浜市教育委員会での制作した郷土学習のテキストにも使われることとなった。

これらの成果が認められ、2010年に同校は四国初のユネスコスクールに認定された。4年前からは市内の全中学校で別子銅山への登山学習がスタート。昨年度は全小中学校がユ

ネスコスクールに認定されるなど、高校発の学びが地域全体に広がっている。ガイドや中学生向け授業で堂々と語る生徒たちだが、ユネスコ部員の一人は「中学までは人前で話すことも苦手でしたが、高校に入ったら何か変

わりたい、と思っていました。サマーキャンプで面倒を見てくれた先輩にあこがれて新居浜南高校に入りました」と言う。調査や出前授業の準備、校外での発表など土日もないような忙しさだが、毎日充実している。

一昨年度は、地域づくりの学びを深めたいと愛媛大学にAO入試で合格した生徒が2人。どうしても地域にかかりたいと民間企業を辞め、市役所で働きはじめた卒業生もいる。学びの循環は新居浜市にたしかに根付いているようだ。



河野義知先生(情報科・ユネスコ部顧問)とユネスコ部員
昨年度卒業した河野先生のお子さんも3年間ユネスコ部で活躍した。小さいころからユネスコ部の活動に触れ、自分もやりたいと入学を希望したそう。「自分の子どもを入れたい学校にしていきたい、と思っていたのでうれしかったですね」



▲活動の端緒となったHPでの情報発信。これまでの活動内容や作品はサイトで閲覧可能
URL: <http://nmh.hearts.ne.jp/MTM/>



▲市内全中学校で、登山学習の事前授業を実施。銅や鉱石の実物に触れたり、クイズを取り入れるなど最後まで集中の切れない授業を展開



▲▶一般参加者を募っての「第8回あかがねの道スタディーツアー」。旅行会社との打ち合せ、道中のガイドも生徒が担当。入学したばかりの1年生もガイドデビューした



▲5年がかりで完成させたガイドブックは生徒たちが足を使って取材した成果。150ページを超える

School Data

1950年創立／総合学科／生徒数358人(男子106人・女子252人)／進路状況(2014年度)大学・短大26人、専門学校37人、就職51人、その他1人